

みる つくる がたる



VOL.26

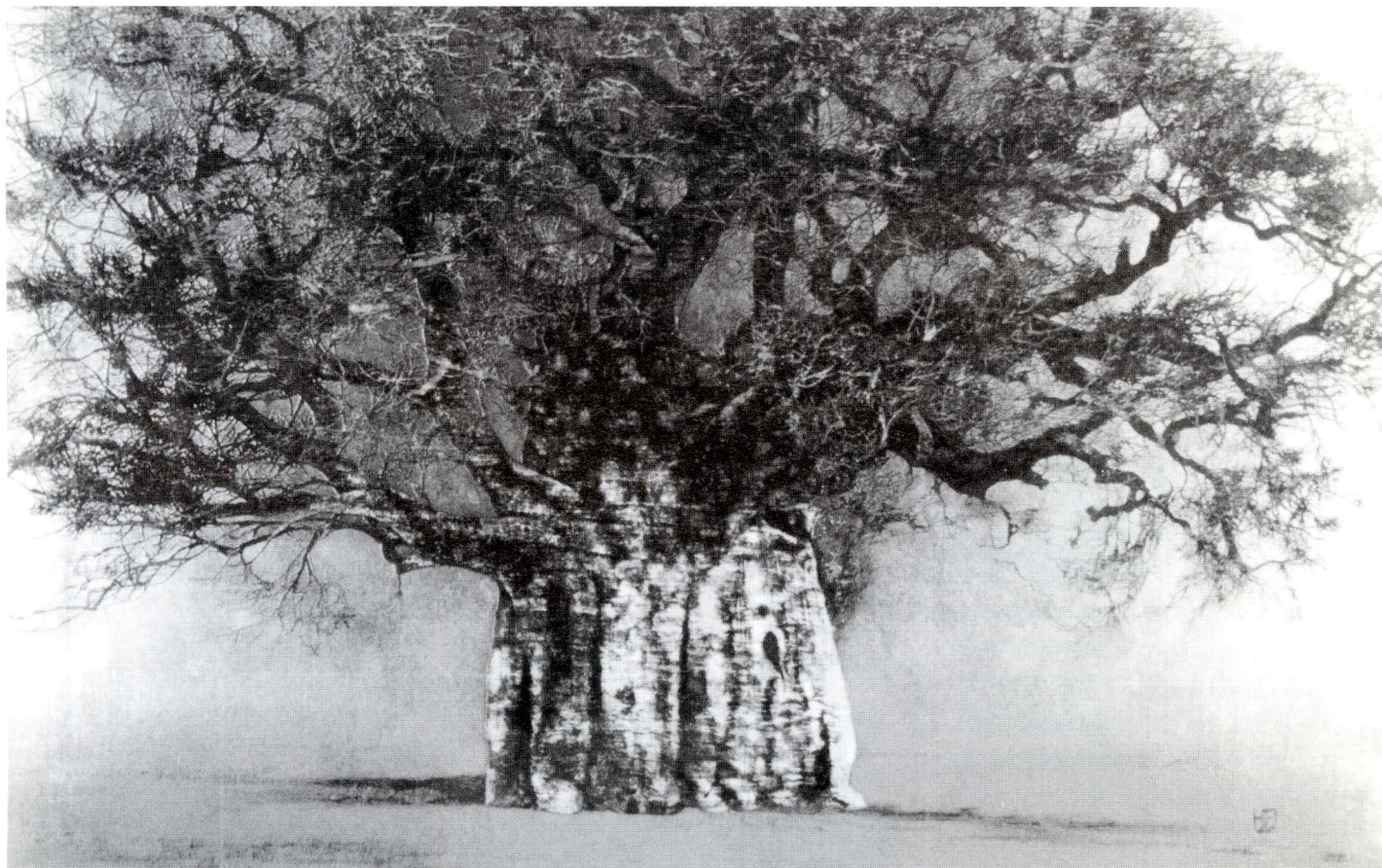
1999

ART NEWS
千葉県立美術館

APPRECIATE

DISCUSS

CREATE



星 襄一『王の樹』 1976（昭和51）年 紙・木版
千葉県立美術館蔵

1976年（昭和51）に制作された『王の樹』は、星襄一、63歳の時の作品です。星は樹のモチーフについて、「一本の木でも木立でも森でも、思い浮かべるだけで胸に響いてくるものがあってその湧き上がる心象を樹と風景につくっていくということになります。特定の、あるいは具体的な樹を描くわけではなく、あくまでも私の樹に他なりません。」と述べています。

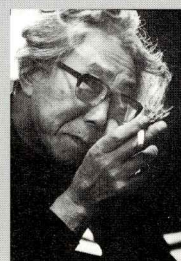
樹をモチーフとした作品は、

1970年（昭和45）頃から、制作されるようになりましたが、作風は徐々に緻密なものとなっています。この『王の樹』は、樹をモチーフとした作品の中でも、代表的な作品のひとつといえるでしょう。どっしりとした幹、縦横に広がる太い枝、やわらかく空間を包み込むような繊細な小枝、あたりをしのぐ威風堂々とした姿は、見る者を圧倒し、重厚な雰囲気をもたせています。

千葉県立美術館
企画展

星 襄一展

9/4（土）— 10/11（月）

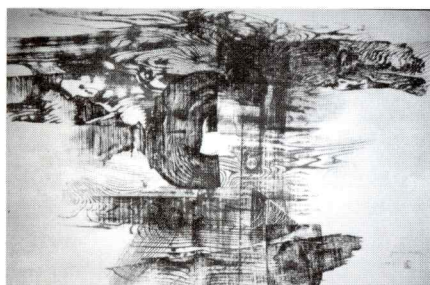


一企画展一
星 襄 一 展

星襄一は、本県八千代市に在住し、独特の技法で、国内外で活躍した国際的な木版画家です。

星は、1913年(大正2)、新潟県小出町に生まれました。台南師範学校を卒業し、現地において、13年間教職に就きました。

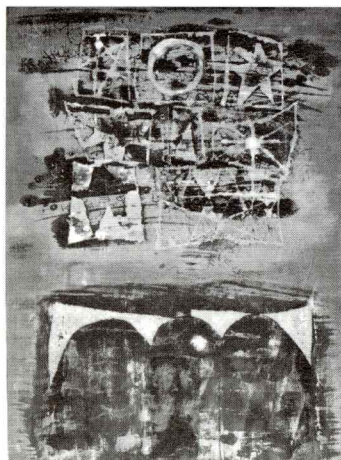
1946年(昭和21)、台湾から引揚げ小出町に帰りました。北光社というガリ版屋をひらき、青年団の機関誌などを引き受け、自分でカットや挿絵を入れ、評判となりました。それをきっかけとして孔版画を始めました。



「水」1959 千葉県八千代市蔵

1948年(昭和23)、日本版画協会展に「八海山」を初出品。1949年(昭和24)、星35歳のとき、日本版画協会展で根市賞を受賞し、会長の恩地孝四郎氏宅で手書きの賞状を受けました。1952年(昭和27)には、日本版画協会会員となりました。

星はその後、画家になることを志し、本格的に絵画を学ぶため、家業をすてて上京しました。武蔵野美術学校において、油絵を学び、1956年(昭和



「星座二番」1965 千葉県立美術館蔵



「森に棲む月(大)」1970 千葉県八千代市蔵

31)、43歳で卒業しました。この頃、木版画を独習します。自他共に版画家として、遅いスタートと言われています。

当時の版画は、抽象が主流で、星も木版画を始めてしばらく、白と黒を主にした抽象が続きました。1959年(昭和34)、第33回国画会展に「水」を出品し、国画会賞を受賞しました。1960年(昭和35)、国画会会員となりました。同年、第2回東京国際版画ビエンナーレに「雪の中で(J)」「雪の中で(K)」を出品し、さらに第3回、第4回の東京国際版画ビエンナーレに続けて出品、国際的に活躍を始めました。

また、1965年(昭和40)には、星の人物をうかがわせる話として、台湾時代の教え子数百名が自発的に組織した現地大歓迎会に招待されました。招宴は一月に及んだと言われます。この頃から、星座をモチーフとした作品が多くなります。



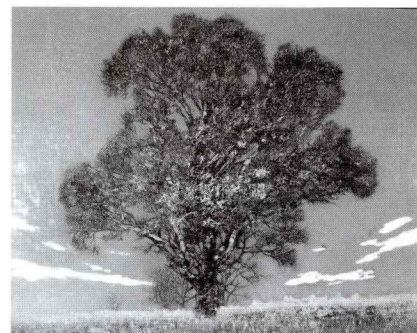
「陽(林)」1978 千葉県立美術館蔵

星のモチーフは、彼自身の言葉をかりますと、『絵は誰にもわかって頂かねばならないという反省から、徐々に抽象的表現から離れつつ自分の道を模索してきました。』と述べています。水・雪・星座・銀河、そして星の代表的なモチーフ、樹とかわりました。

1966年(昭和41)には、ジュネーブ日本現代版画展、オクラホマ美術館日本現代版画10人展、第5回東京国際版画ビエンナーレなどに出品。1967年(昭和42)には、サンパウロ国際版画ビエンナーレ、現代日本版画展(ロンドン)などに出品するなど、ますます精力的に活動しています。

また、1972年(昭和47)、日米首脳ハワイ会談で、田中首相からニクソン大統領への贈り物の一つに星の作品「白い林」('71)がえられました。

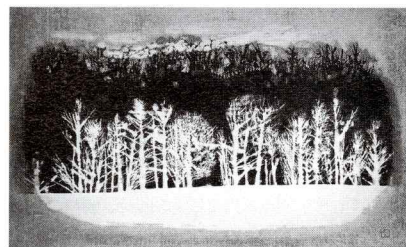
1975年(昭和50)から、第1回日本縦断星襄一木版画展が始まり、1978年(昭和53)に第2回展、それに前後して、星襄一木版画自選展、星襄一木版画展など、星個人の展覧会が開催されました。



「野の木(A)」1978 千葉県立美術館蔵

このような、めざましい活躍の中、1979年(昭和54)、66歳で逝去しました。

星は、身近にあるシナベニヤを版木に使い、彫刻刀と共に独創的な鎌や鉄筆などで繊細に彫りました。さらに彼独特の技法ガスパーナーで板面を焼き、彫り口をソフトにぼかすと共に、金、銀箔を刷りこみ、華麗な効果を上げるなど工夫し、星襄一の世界を確立しました。



「白い林」1971 千葉県八千代市蔵

本年は、星襄一没後20年にあたります。これを記念して、八千代市の協力を得て、星の初期から晩年に至る作品約130点、及び版木等もあわせて展覧し、作家星襄一の画業を幅広く回顧いたします。

会 期 9月4日～10月11日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入 場 料 無料
休 館 日 毎週月曜日
*10月11日(月)は開館

開館 25 周年を迎えて

館長 鈴木道之助

千葉県立美術館は昭和49年10月に開館し、本年度で25周年を迎えました。この間、420万人以上の方々にご来館いただき、特別展・企画展などの鑑賞事業や、公募展・県展などの県民参画事業、県民アトリエにおける実技講座などの事業を実施してまいりました。また、県美術界の関係者をはじめ皆様のお力添えを頂き、展示・収蔵作品も質・量共に充実してきております。

ところで、当然ではありますが、この間、特に最近10年間の美術館を巡る環境は大きな変容を遂げております。その一つは、企業系等民間美術館及び市立美術館の誕生であります。平成11年8月現在、県内に所在する美術系の登録博物館及び相当施設は県立1館、市立3館、企業系3館、宗教法人系1館の計8館であり、入館者は平成10年度で総数805,499人と別表の通り、10年前の実に4.5倍に達しております。本県における芸術文化の振興を如実に示すものでありましょう。今一つは、作品を自ら制作するあるいは制作しようとする人が著しく増加したことです。各分野での正確な活動人数の把握は困難ですが県展や県美術館で展示する各団体展の出品者は平成10年度でそれぞれ3,365人、463,353人とこれも総数では20年前の1.6倍と17.8倍であります。ちなみに、生涯学習時代に備えて平成8年、柏市に開設された「さわやかちば県民プラザ」での美術講座も1,054人という多くの参加者を得ております。

このように、美術関係の裾野は、大きく広がってきており、家族や縁者が何らかの形で関わりがあると言っても過言ではないでしょう。そして当然ながらそのニーズは多様化するとともに選択化がより鮮明になってきております。例えば、典型的な鑑賞事業である特別展においても、某企業系美術館では、ある特別展で月約7

万人の入館者があったかとおもうと翌月の特別展ではその1割に激減するなど落差が極端であり、学芸員を悩ませております。

こうした流れの中で、これまで県内における美術の殿堂として殆ど唯一といってもよかった当館もその役割が微妙に変化してきております。芸術文化の振興とあいまって様々な分野での芸術活動が求められておりますが、一般的に普及事業は企業系美術館では性格的に困難であり、市立の美術館でも地域的に限定されてしまいます。当館では設立時から「みる、かたる、つくる」というコンセプトのもとでバランスの取れた美術館活動に努めておりますが、初めての方でも気軽に芸術活動に参加できるよう各種の美術講座の増設を図るなどソフト面をさらに充実していきたいと考えております。今後とも皆様のご協力をお願い申し上げます。

年度	別表 / 入館者の推移	
	館数	入館者総数 (人)
平成 10('98)	8	805,499
平成 5 ('93)	5	728,399
昭和 63('88)	1	177,458

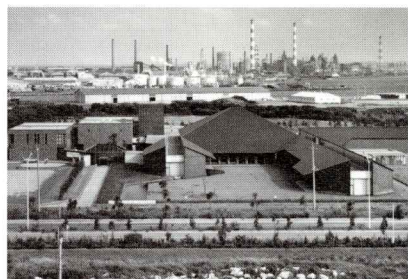
沿 革

ここでは、千葉県立美術館の25年の歩みを、主だった出来事のあった年度を軸として紹介します。

<開館>

建設のための懇談会を開いた昭和44年から5年の準備期間を経て、昭和49年10月23日、千葉県立美術館が開館しました。この年には群馬県立近代美術館も開館しました。現在全国で活動している公立美術館は相当数ありますが、当館は初期の開館であったといえます。

約1万坪の敷地に平屋建てで、展示室内はゆったりとした空間をつくりだし、全室を通じ段差がありません。今日では非常にぜいたくな造りであるといえます。駐車場は約100台の利用ができ、無料で提供しています。このほか、埋め立て地という立地から、外気を4層のフィルターで



ろ過して室内に取り込むなど、随所に工夫をこらしています。

<展示活動>

一番最初の展覧会は、開館翌日の10月24日開催の「千葉県美術展覧会(県展)」です。以後、千葉県の風土に関連づけた「描かれた房総」(昭和49年度)、県関係作家に焦点をあてた「香取秀真とその周辺」(昭和51年度)、美術の各分野での主だった活動を取り上げた「近代陶芸のモダニズム」(平成3年度)、など、千葉県を中心として多様な展覧会を実施しています。また、公立美術館としては初めての試みである全国公募による「浅井忠記念賞展」(昭和58年度より)、「現代日本具象彫刻展」(昭和59年度より)を開催し、さらに千葉県ゆかりの作家を顕彰する「房総の美術家シリーズ」では、旧制千葉中学の教師、堀江正章や院展で活躍した日本画家、富取風堂などを取り上げ、これまで25回開催してまいりました。この他、多様なテーマによる常設収蔵作品展などを開催し、コレクションの展示につとめています。

昭和52年度

この年より「千葉県移動美術館」を開始しました。当館の収蔵作品をより多くの県民の方々に鑑賞していただくために、市町村との共催により県内2地域で開催するものです。今年で23回を迎えるこの活動も、全国の美術館の中では比較的早い取り組みでした。



第1回千葉県移動美術館 会場(県立安房博物館)



＜普及活動＞

昭和55年度

県民アトリエ棟が完成しました。延べ床面積は1,502㎡(約460坪)。これほどの規模の独立した建物がこの年に完成したことは、当館がかなり早い時期から時代を先取りして美術館の普及活動を重要視し、それに力を入れてきた証といえます。このアトリエ棟は、200人収容できる<講堂>、美術に関する情報を集約する<情報資料室>、多目的に利用可能なく研修室>、実技体験の場を提供する3つの<アトリエ>を備えています。講堂や研修室では、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉による「ミュージアムコンサート」、各方面での専門家を招いての「美術を語る会」、「美術講演会」など、各種イベントを実施してまいりました。<情報資料室>では1万冊以上の展覧会図録、5千冊以上の図書資料を収蔵するとともに、資料室脇に常時40本を鑑賞できるビデオ・コーナーや、インターネットで掲示中の県立博物館の最新の情報を閲覧できる「県立美術館・博物館情報検索コーナー」を設置するなど、様々な形で美術情報の提供に努めています。

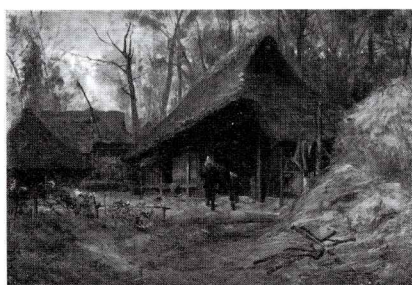
全3室よりなる「アトリエ」では、
県下の美術家の方に講師を依頼し、
洋画講座、彫刻講座などの各種実技
講座を昭和51年7月より開始し、当
館の主要な事業のひとつとして好
評の内に今日まで継続しています。
昭和58年度

開館10周年であるこの年は、県展開催35周年でした。県展は今年51回を迎え、千葉県最大規模の展覧会として発展を続けています。この後、入口門扉の設置や生垣の植栽、展示室、収蔵庫の増築工事などをすすめ、昭和63年度に今日の8つの展示室、4つの収蔵庫が完備しました。8つの

展示室のうち、主に第4、5、6、7の4つの展示室を県下の美術団体に提供しており、年間およそ80の展覧会が開催されています。この展覧会だけでも、これまでに延べ1,700回近くも開催し、年間50万人近い方々に出品というかたちで関わっていただいています。美術を中心に多様な活動に取り組んできた当館の誇る実績のひとつといえます。

開館15周年のこの年に、記念特別展として「房総と近代美術」を開催しました。重要文化財である青木繁の「海の幸」を展示するなど、それまでの展覧会活動の総決算といえるものでした。平成6年の20周年記念特別展「房総の美術」では、収蔵品はもとより、当時活躍中の作家まで対象を拡げた展覧会を開催し、開館以来推し進めてきた当館の「房総」に関する展覧会の節目としました。

＜コレクション＞

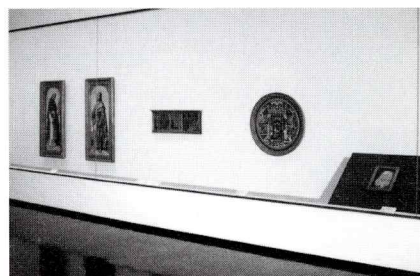


開館初年度は132点からスタートしたコレクションは、この25年の収集活動の成果として、約1,900点(日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の6ジャンルを収蔵)を数えるまでに成長いたしました。なかでも浅井忠のコレクションは最も力を注いできたものであり、油絵8点、水彩画9点をはじめ、日本画、工芸図案、陶芸などの多様な作品、さらにスケッチブックや絵のはがきなど1,000点以上の関連資料を収蔵しており、質量共に日本一を誇っています。また、浅井に関連し、1)師弟の作家の作品2)水彩画家の作品の体系的収集(浅井が優れた水彩画を残したことから)3)ミレーなどバルビゾン派の作品収集(浅井の師であるフォンタネージがフランスのバルビゾン派の影響を受けていたことから)にもつとめ、い

ずれも貴重なコレクションを形成しています。このほか、金工家の香取秀真、津田信夫を中心とした近代日本工芸史上代表的な作家の作品の収集や、県立美術館として県内出身か、あるいは在住するなど千葉県とゆかりのある作家の作品収集につとめてきました。

＜おわりに＞

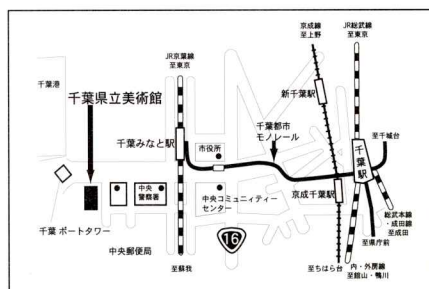
平成4年度に入館者300万人突破、平成9年度に400万人突破と、年間20万人近い方々に御来館いただき、展示、講演、制作など、美術に関する様々な体験や、知識を深める場を提供してまいりました。去る6月には、特別展「ヒューストン美術館展」を開催し、房総、あるいは近代美術という今までの枠から一歩踏み出して、約600年間にわたる西洋絵画の豊富な流れを概観し、好評の内に終了いたしました。



これまでの活動を基礎として、美術に関するより充実した機会を提供する場として30周年に向けて歩んでいきます。

＜美術館案内＞

- JR(京葉線)・千葉都市モノレール
「千葉みなと」駅下車徒歩8分
●JR「千葉」・京成電鉄「京成千葉」駅より「千葉ポートタワー行」バス15分「美術館・中央郵便局前」下車徒歩1分



〒 260-0024

千葉市中央区中央港1-10-1

電話 043-242-8311(代)

<http://www.chiba-muse.or.jp/ART/index.htm>